

退職のご挨拶

小林憲正

新型コロナウイルス (COVID-19) の影響で、これまでになかったようなご苦勞をされていらっしゃるのではと思います。私は、この3月に無事、定年退職となりましたが、まさにこの影響を大きく受けており、最終講義など、一連の退職行事のほとんどが延期もしくは中止になっております。また、4月以降も、科研費が採択されたこともあり、しばらくは横浜国大の片隅でこれまでの研究を続けさせていただくことになりましたため、ますます3月でしっかりとした区切りをつけられずしております。在宅勤務推奨ということもあり、現時点（7月）では、週2日程度大学に参っております。

というわけで、これまでの自身の歩みを総括するという雰囲気でもないのですが、振り返ってみますと、まず、自分が学生・院生の時（昭和48～57年）も、その少し前の大学紛争の影響がまだ残っており、ちゃんとした入学式・卒業式・修了式がありませんでした。よほど、そういったものと縁のない世代のようです。博士課程修了後は国内外でポスドクを5年半勤めた後、1987年10月に、ご縁あって横浜国立大学工学部に採用していただきました。「物質工学科」ができて間もない時期で、所属していた分析化学の研究室は、土屋正彦教授（平成28年ご逝去）のほか、佐藤寿邦先生、金子竹男先生、横山幸男先生（現国大化学会会長）および私という教員5名の大所帯。一方、学生は2名の卒研生のみという特殊な状況からのスタートでした。その後、徐々に学生も増え、楽しく研究を続けることができました。

横浜国大着任当初、いろいろな場面において「実学」「実践」というモットーを聞く機会が多く、一方、私が主に行ってきたのが「生命の起源」というもっとも実学とかけ離れた分野だったため、うまくやっていけるか心配でした。それでも、いろいろな先輩の先生方は役にたたない、とはいわず、「夢のある研究ですね」などとおだてて下さったおかげで、なんとか続けていくことができました。平成9年に土屋先生が退職された後は、金子先生と二人体制となりました。その後、大林由美子先生、癸生川陽子先生にも加わっていただきました。その間、学内で3つの学会の年会を開催させていただきましたが、運営はほとんど金子先生、大林先生、癸生川先生に



おんぶにだっこ状態でなんとか乗り切れました。

最後の十数年、主に行ってきたことは、日本においてアストロバイオロジーという分野の基盤を作るのに走りまわったことでしょうか。本格的に活動を始めたのは平成17年頃で、当初は鼻にもかけてもらえなかったのが、ここ数年でようやく文科省などに認知された状況です。とはいえ、まだまだmajorな分野にまで育っておらず、従って大型研究費を引っ張ってくるには至らなかったため、大学にはあまり貢献できず、申しわけなく思っています。

アストロバイオロジーは生命の起源・進化・分布と未来と定義されており、私は当初はもっぱら起源と分布（生命探査）にばかり興味がありましたが、近年は未来の話も重要だと気づきました。未来とはつまりは絶滅の話で、生命誕生と絶滅は裏表の話です。多様性が失われると、環境の変動により絶滅の可能性が高まります。翻って、日本の大学の状況には暗澹たる気持ちを抱いております。国からのサポートが減り、大学間の競争が煽られているため、その対応として大学としても「すぐ役にたつ、お金の稼げる研究」を重視した体制をとらざるをえないことは承知しております。しかし、研究テーマがその時のmajorなものだけに絞られ、多様性を失った場合の弊害はすでに出ていると思います。大学として、また化学EPとして、majorな得意分野を伸ばすのと、minorながらユニークな研究を残すことのバランスをうまく取り、発展されていくことを祈念しております。

コロナ禍もなかなか収束しない中、みなさまのご健康とご発展をお祈りいたし、挨拶文とさせていただきます。

折りに触れて考えてきた「名教自然」の意味

渡邊正義

令和2年は、年明けから暫くすると新型コロナウイルス禍が世界を席捲しました。定年をひかえていた私は、まだコロナ禍の話題が持ち上がる前に最終講義の日程を令和2年2月22日に決め、研究室のスタッフの方々が準備を進めてくれていました。最後まで、決行するか延期（中止）にするか迷いましたが、大学執行部とも相談しまして、入り口での検温、アルコール消毒、マスク着用という対策を講じて実施しました。幸いなことに、参加者から異常の報告は無く無事終了することができました。翌週の2月25日には、政府の新型コロナウイルス対策の基本方針が発表されるなどで、警戒態勢が一層高まり、これ以降最終講義を予定されていた私の友人の先生方は、皆さん延期（中止）という事態に追い込まれたようで残念でした。現在でも、春学期の授業は全てウェブ講義、研究室学生の登校も制限されている状況で、現役の先生方のご苦勞は如何ばかりかと拝察します。

私は、平成4年本学工学部に赴任して以来、令和2年3月までの28年間本学にお世話になりました。最後には、工学研究院長・理工学部長として大学管理運営の経験もさせて頂きました。その間の研究に関しては、日本化学会の「化学と工業,73, 258-259 (2020)」に執筆の機会を頂きましたので多くは省略させて頂きますが、優秀な学生や同僚、博士研究員、共同研究者などに恵まれ、充実した研究生活を送ることができました。特に、本学赴任時および研究室立ち上げ時にお世話になりました友井正男先生（本学名誉教授）、教授になってから一緒に研究室を運営させて頂いた、今林慎一郎先生（芝浦工業大学）、竹岡敬和先生（名古屋大学）、さらに定年まで一緒に研究室を運営した獨古 薫先生、上野和英先生、小久保 尚先生には改めて感謝致します。今後も電気化学、材料化学の分野を益々発展させて頂きたいと思っております。

さて、私は4月以降も先端科学高等研究院の特任教授として、研究継続させて頂いております。特に現在受託している科学技術振興機構（JST）の研究を中心に進めております。4月以降で変わったことは、毎日昼過ぎに学内散歩を始めたことです。コロナ禍もありまして毎日車通勤、さらには、従来は週1～



2回はあった東京出張、また国内・海外の学会出張が、現在は全て無くなり、歩く機会が極めて少なくなってしまった事への対策です。学内を大回りすると約30分、距離は2.5 km程度です。28年間本学においても学内を隈なく歩くことは無かったのですが、学内の草木の季節による移り変わりや、ご神木のように聳える大木を眺めるなど、学内探訪を楽しんでいます。学内でお見掛けの際はお声を掛けて頂ければと思います。

最後になりますが、教員生活でやはり最も貴重でかけがえのなかったことは学生達との触れ合いです。学生達の多くは、学びたいそして成長したいと思っています。この思いにどう応えるかがやはり大学教員としては最も重要な課題かと思えます。あることを教えるのにどのように教えるのが最も分かり易く本質的かを考えることは、自分の理解の深まりにも通じます。研究課題に対してどのように取り組み、どのように纏め上げてゆくか？さらには未知のことに我々がどのように挑戦するかを見せて行くことは大学教育の醍醐味かと思えます。教育に関連して、工学系キャンパスのシンボルである「名教自然」の碑の意味を本学赴任以来、折に触れて考えて来ました。私が教員の立場でたどり着いた結論は、

You cannot teach a man anything;
you can only help him find it within himself.
Galileo Galilei

です。今年になり「名教自然」の碑も化粧直しをして一層映えています。今後も、本学に学ぶ学生が教員の指導のもと世界に羽ばたいてくれることを期待しています。